内閣文庫
和書
類 一六三一三
號
冊 五
函 一四九
歯
架 一八

内閣文庫
番號 和 16313
冊數 5 ( 5)
函號 149 70

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍
鎮

日本政府圖書

柳宗婦女傳系卷之拾三

和學講談所

鶴姫君位杖君御母堂称公殿ニ九殿ニ

瑞雲院殿之偽系

瑞山泉光院殿　巖有公御母五賀樹　御妹々

院殿の御母君なり

世尼上洛の農夫の妻也　は農夫より嫁セ

し妹の娘を仙光院　江戸へ呼寄を自分

此為名養子を為し名跡を

巖有公の大夫人高巖院殿此本の間

の事なれども仕方なき事にて法華経
を後世の善を勧め振舞を取く
仙光院殿の御世話をも御坊丸殿の内
小姫様と称し姫様男子を人如子二人
出産し給ふ紀氏様家員
窮なる事は仙光院殿を離別の事を勧め
ら御出家なされる同北時迄ありや一
日〳〵と過し候し男子様は御坊丸
行跡悪く動乱し者

様を好き性法を事とし
光と仕〳〵又母の動静を安〳〵逐電
法師となる過後の朋友は田山沖市
天狗十郎兵衛村内高三村清右衛武蔵
を佐渡井宗利等寄合く様太郎を打殺
せり此を天和元年壬戌二月の事也清宗
磬の上吾死罪を行はる
一説に小姫様家事延寶八庚申
常憲公御代替の後御坊丸殿

和田金右衛門殺害致し横領致し候ゆへ彼
小山田浜市と始め悪徒組合天和元
月日の夜横田家宅へ忍入夜盗を
始め村内横田家へ起き合働んとすゆへ
急切教〳〵立去り如何く彼浜市を人
形を以て寄集めつゝ遂に召捕られ
天和弐年壬戌八月十四日為磔刑
ゑ磔罪に成候ゆへ小山田浜市は元来
悪党の源出わるく酒井彦理太夫浪人
第一女房初て浜市に組候松井与三兵衛の妻
を形り
与三兵衛の妻松井伝左衛門は此度変
死を家内大に騒を勤めて浪人し
て八幡男就と云花を改めい方組まつり
世上渡世を営の与三兵衛は妻を要申し
ゆゑ三月に離別申妻振は妻食井
又右衛門に再嫁申候形り
妻振離別して文橋兵衛の花婿と云合

井武左衛門之丞倉橋左兵衛尉倉
井を改め小屋掛となる也
武左衛門大久保甚左衛門入道甚八の娘中
より新田の倉井先祖と云ふ新田の
末裔なり倉井新田大久保武入は
今の大久保市郎左衛門の父也
紀伊守武左衛門尉[illegible]して病死せり後
相模守勝之白山御殿同心を勤め相模守
と云者を[illegible]婿子[illegible]武左衛門と云者を[illegible]

魯如侯せしめ小姓[illegible]と称せしも叔
父甚助お初は白瀬(浜)戈之丞妻女として
斉之助[illegible]厚くも扶軍部常憲公[illegible]
命を俗く法側法出[illegible]人牧師[illegible]
奥再び甚助妻女として戸田清左衛門
の室となる也男女の甚[illegible]元
来戸田氏と牧[illegible]氏縁[illegible]
中二女八お[illegible]の方おく文の同役平井
右左衛門の娘[illegible]して 熊林宰相公(後吉宗)
辛憲公の

御母藤桂昌院殿へ御参詣被遊
文十〇庚戌十二歳おしていわ姫を勤め
申候　宰相五黄七殺に付御女を御離
書を遣わし延寶八辛丁巳四月八日武
江白山の舞しして十九歳の時　鶴姫
殿を偽り同七辛巳未六月六日神田の館
おく　徳松君を養せり是より偽て父母京
鎌倉出世し七沢御屋敷なりし先例より
付せく百人扶持を御領し　徳松君

法外祖母なるゆへ公命をかくし堀田紀和
守正俊より名氏を授與し堀田相模と
名を改めて御一族も昇られ立身致
候　此度柳沢氏の先祖八幡殿甲斐国小屋
より出る故に名を小屋氏と号候
往昔源頼義東夷征伐の時小屋三所
付き人宮来り来り地玉の御士と
形りし子孫なり
　　御偽の方御養扶持方馬大夫志云

藤氏流人一廷尤事義俊の女
常憲公の御側女となり懐妊し
月満すして流産せり後日小納戸行事
氏の妻となり小され都くたるす
して早世せり後如実御京吉利出
う家光如実を出産利位
常憲公御幸過を家宣懐妊先又家
よりの流産せり御のお仕の方延寛八年
庚申六月 常憲公御代替の後御代
称し称し後人宗仲に芸後人九條を
号し寶永六己丑年四月十日
常憲公薨去の後 鶴姫院殿と称し
江城二丸に御住居し九條
唱し御逝去せり賢恵ひとり厚沙汰り
因南部軍家御台母公 浄光院殿の
上に対し奉り仕えしなり
実父八橋山淳二郎忠正院の妻白須
十六歳の二男白須左衛門の妻 法光

聽院と称し後ハ小石川富坂御屋敷
御ハ御居也
白須十三郎母ハ小笠懸三郎長嘉妹
おゝ光岳院殿の姉等也光岳院
殿ハ伯母塔山泉光院殿の世話ニ
ゝ白須十三郎方へ嫁ゝて儀ゝ
婿男ハ後の白須十三郎ゝ光也
同家の家を勤め同二男ハ白須
源太郎ゝ平世丹波守長政の家

を如ゝ二男白須女房ハ塔山
家ゝ給人格ゝ小笠懸
ゝ奉ゝ奉ゝ如ゝ御家人
ゝ出ゝ娘ゝ三百俵ゝ婿ゝ書子
ゝ子ゝ源ゝ如ゝ女房ゝ
白須ゝ助ゝ公命ゝ儀ゝ
茂兵松長久早世ゝ願ゝ
儀ゝ国清ゝ家ゝ助
歳子ゝ世ゝ松長

諸又之ごとく故を故を帳面親と名を
改め一万石を洋銅一万斤変と称
ト市中也ものと仰ち机寄保之助
外個馬ものと名を改む是を故氏
先祖代々の家号也如ハ常憲公
四側ものと出人牧野備後守成貞の
養女として六代治好ものと成貞之孫
より数之女を以嗣子なき故ゆえ
先十三歳の嫡子を同兄源太郎

子求而女人を養ふとメて会稽
を配分し譲与ひ如ものと人
実ハ小屋稽古ものと如ハ初之ものと
方又一度斎之ものとくて後也
牧野備後守成貞之養女ものと
又嫁せり

戸田家

某

女 紫 七次代の家 清家妻 後号泉光院

女 嚴有五郎妻 寶樹院殿

女 下野國古河の農夫の妻

某

女

中尾檀之清 堀田相模守監

相伴百人扶持病死付遺筆于死骸

於世号院 清名院元子院殿日信居士

号名紫

女

文檀之清 夫病故外祖母泉光院

勸離別亦不用之後泉光院入寺住

高倉院殿勅撰作者歌人為代書之為
名業氏名公泉光院〻姫名故儀
名〻振於代世遇故夫婦出世号
高兵院尋于高田日蓮宗〻寺

女

嵯山法皇四男白河十六条

以伯母泉光院〻御ハ嫁〻

親

白河十六条

勅撰山法皇恩四家老

親

白河法皇

仕平野丹波守長政為家老

親

白河法皇

為小屋修理亮舞故云 長出羽守
三百俵光光院〻走也後加恩式

百石所領之

女

戸田清路吉氏娶家

実小屋横之嫡長女

為牧野伯爵吉郎貞吉嫁之

女

六々伯爵吉政賜家

母小屋横之嫡女　号光照院

亂親　婚名所之聊　吉家但吉吉　吉張　下吉吉　従又位下

親

母同上

為吉家松名碩領一万石

白須吉之嫡男

実　婚吉家　白須吉之嫡男

長浜

貴文吉之嫡実子所之聊吉家貴

家仍吉為吉之末貴子吉横之嫡

督

元禄十六年壬午二月廿九日入寧

令十二月廿二日又少之増洋領加

恩永百石

同十七年甲申十月廿二日絶又

家督

白須求馬

実八白須源太郎男

親

為伯父少之増養子被仰

元禄十五年壬午二月廿九日入

寧令

同十七年甲申十月廿六日免

立馬絶又赤穂浪士拝領分知

小屋横太郎

親

依不行跡ニ勅命逐電相届

小山田治市郎横死

於初　金井武仁妻

母高岳院

金井東屋　初大久保長門守忠入道忠入家来後改少屋

為小屋檜云来名改故右初嫁〻於初

姫為以流組改杉井与三左衛妻云〇

協離別再嫁金井氏

於俗称大九殿又三九殿　号長院殿



臨終居

紀伊中納言綱教公室

御母堂陽春院殿

貞享元甲子〇乙丑二月廿二日御入輿

時九歳逝去法名子自氏時廿十

九年元禄十六年癸未巳月十二日逝

時廿八歳

法名浄信院殿澄誉恵鑑光運

大姉　墓増上寺

徳松君

御母岡上臣

天和三癸亥年閏六月廿八日逝

同六月廿日葬于增上寺

女

白須甚三郎妻六人の政賢妻安藤彦兵衛妻

人之母後号光照院伯耆守川勝広重

妻

小屋甚四郎

実者祖父小屋権兵衛清勝之養女

左衛門白山殿公子也仍而縁為武左

衛門尉子

元禄十丁丑年三月廿九日入寄合

十二月廿二日加恩弐百石

常憲公御代局

大奥御局之御系

大奥御局始の名ハ花盛井と号し
帝都新上西門院の御女房ハ
中納言民信卿の女也新上西門院ハ
常憲公の大夫人浄光院殿の御連枝
鷹司関白房輔公の姫君ゝ浄光院
殿の御姪也故ゝ浄光院殿より新上
西門院の御方へ参勤ある女御を以て
の此御世話ゝ附数多の女房の内
より撰ミ出され関東へ下し大奥御
と名を改め浄光院殿へ仕奉表
北向中之丞紀ゝ子名籍表より且つ
容貌已清ゝ婦ゝ故ゝ常憲公
の御寵ゝ付ひ浄光院殿ゝ御黄ひ
なくくらゝ寄ゝ成ゝ色ゝ出来ゝ
て想女中の所ゝ御擬ひと陽

以且つ名跡をも相続せしめ上意
仰せ付られ附右馬の助の跡目をもって
名を桃井図書助と称し諸会の列に勤
仕せ相伴衆図書助儀病気久敷業
御免田中芸州右馬の一族にして
被官田中主馬の次男也文亀元年
六年庚子九月寅ヶ原御陣に吉政の
先鋒を仕り戦功を顕し御感を受
候ひ嫡男田中三郎右馬の次男田中吉義

聟に御引出し先の田中吉政の長男孫次郎
乱行に依て吉政方不行届を没収し
家断絶に付て吉政の弟
と称りて家督相続し文亀元年死去
し兄弟人八郎戸に来り弟上をかせ
兄三郎右馬に井伊掃部頭に奉仕し
宗福を相続し弟吉義八郎兵衛尉
御免被仰付御長の児小姓
相勤仕を致付御免被仰付

江戸へ来れの時田中出羽と作
て下る時分中より於く出羽の家来
の者共平野橋平従者と為り出せし右
右の従者始め〳〵彼の者と数く打合し
打倒し〳〵逃りし也其時出羽初め
其他の事元分にして出羽は従者
諸藩中上下共出羽を嘲笑し多く
云々の詩句を出しこれ等の問答
の者共も出羽と共に出羽の家従也と云来の打倒

されしと聞者よりそれを逃りしてて
逃る者共出羽を出羽士の道にはい
矢張りと批判をしと少く出羽の
中の主従〳〵右流儀の者と数人と絶〳〵
付捕〳〵年久〳〵京都に住居せし
所〳〵右の事故出羽の嫡男源の中
勢を捕役武の代に播磨姫路に於く
出羽それ二百石を受領して江戸屋敷
番役を勤相の貞享の比西丸番

仲ヶ間石川豆腐屋憲之へ の家人池田
七郎兵衛と申候の親類にて候
兵衛久保伝兵衛方上のすを出
新一郎ら数多出へ身上かせ出
元指し政出の出候用人相下又左衛へ
伝兵衛を達て数の身上を新こ中せ
将の所絵句張より中の通り者共は
呼出され今故伝兵衛もかく出
出るまを新相下又左衛へ身上こ

御法度切こ中有出義は又左衛
右候を伝合出候こ流人は繁量
通り三枚式方の家へ向こ中さ流の中を
中おかく出新たり部を七兵衛伝
兵衛中伝を呼大は蛇屋新
相下又左衛へ住こ云ら中
家の事迄中又新左つ出中
将御法の処は私繁量通り者の中
伝ら通り本不書也武士八大人小人の

撰なく〻そ人柄殺伐として御用立
為致人を左抱へら海へ抱こむ事大人笑
被申ふくとも河法ゆとも抱られ戈
智度的ゆとくも小人なれを左抱へ
ら生さるやい小人なれも大人の又
たゝ為と偶一緒員変生へしとく
胡人ゆ対すゆ東まゝ祝しすとり
又墨と打果さんと伯長者ゆ武振
若立合へらはへしとくゆ嘆生

と云へとも伯之和ゆゝ家ゆへ先七郎
云和方へ中をせとを東士の意乱左理
なれた先生の指ゆ海を事相しと
云故ゆ陸方なゝメ大物集ゆとく伯之
海を九生くめ羽へ付ゆメ船筋ゆ家て
海安を退出し遠中ゆく退散し
り早先ゆ偽ゆく伯之和先七郎之和ゆ
関詰し中物之浦を長江郷大ゆ
南書ゆれを武庫伯伏して書者ゆ

神田元柳に預ける御中間喜兵衛中間長
与り物の侍同附川治郎太大西六郎
右を見付く彼妻つるを吉左衛門を始め
を伺ひ云為を掛合肩書を切付る迄
吉左急云創主より之大西六左
衛門掛合く右の通大西源吾を呼
家中同事て始めて大勢有る左
伺ひ来たる清水杉平造酒亟輝貞
[illegible]
寺文之輔 取敢表門脇を家敷て伺

地(ヵ)立退如兄七郎兵衛七十郎を
左之通りく聞き刀人又ヵ立退申
伺ひ来り下人は[illegible]を屋敷付寄て伺く
松下又右衛門切彼者付田中吉兵衛を
立退皆く之通身を隠せり之後東敷
おく雲上方へ公安く出入く江戸
公儀を始め御創へ水戸藩と入魂す
敷く京都より江戸へ来く清水寺今
戸為す伺居く水戸藩と入魂の

故を以て太郎作の祖母を書して
太郎作の御子の宿所を知り恩恵を
蒙り又云家の縁を以て上野御門跡
へ出入し猶主殿一昨日云弁法親王の
御実子中将殿の義を藤堂久川右衛門
等に主張右御門跡御家来に
お書商死なれども太郎作を以首会
代の御書八幡宮久米河内守代
の姉也此妻の姉八洛陽永観寺北
行者田中賀純の妻也此賀純の妻
先の一如子猶主殿に頼る
俗に出家出家なれども太郎作外孫
分にして都筑英流寺右保の例女子仕
り主殿男子を養ひ松平刑部少輔安
房国式部少輔附賜ひ英流寺
常憲公の御出家人の縁を設て
主殿書物英流寺取扱を以て
元禄六年癸酉十二月廿二日

扨軍家に法大筆之永長者始て
武百傳を拝領し再び田中主殿と改
称也其後同十三ヶ庚辰七月二日
又英法寺北殿おゝ大馬作の書を
拝受し以来姓組の列
入同ヶ十二月廿二日桃井内蔵と名を改め
屬勤仕し其後新しきり之院番し
嗣子なき故内藤中務殿の嫡子を養子と
し家督を傳ず又新恩賞メ桃井
晩山と称し内藤主殿桃井内蔵助
参会列し家を保し数年
ら病死去子桃井仙吉家督
メ又平世仙吉桃井家絶
也

水之瀬氏之系　萩原姓

氏信　水之瀬中納言

自水之瀬大祖而十八世之孫也

兼豊　従三位

氏孝　中納言

経業　侍従

女

姫号者藍井
太夫位

姫又新上西つ院の侍女也後者仕
御光院殿

之政

姫田中主殿
田中主家

吉川左衛
改号桃井内蔵助　後称決山

実八田中主殿次男

女

仕松平東波守吉保為妾奉於次男
刑部少輔安通之男武弟出浦時睦
実八内蔵助者女成為妾女白出
内蔵助婚素之姫也永観妻仍者
田中賀純之妻偶事子也実又其弟
云谷享保八年癸卯十二月　日歿

桃井内蔵助

其

実又八内蔵助浪居也家督相續之後

早世実田中於能之妻偏来之男
女共人々子也与兵濃守右俗之妻家
兄弟也実母者如本阿弥家娘也

桃井伯太郎

某

初ヤシメ徳家督未鄭子世知行収公セラル
家臣従ス

柳宮婦女傳系　十四

国立公文書館
National Archives of Japan

柳官婦女傳系卷之十四

常憲公御寵女

壽光院殿之系

清宗寺家ゝ流　森敬笹

冬嗣五六男

良門　従四位下　内舎人

母安倍雄笠女

贈太政太臣　正二位

勧修寺
高藏　大納言
母西市正油屋女
延喜帝外祖也
昌泰三年庚申三月二日逝時二歳
三歳
贈太政大臣

三條
定房
母源益女
日逝時

東宮傅
兼平三年壬辰八月
六歳
六歳

朝賴　右大辯
母山蔭卿女

其家号
道輔　四之位　中納言
母右大臣公任女
寛和二年丙戌八月
日逝時六歳

宣孝　正六位下　右馬允橘俊

母參議従三位藤原義女

隆光　左京大夫

隆方　正四位上　左中弁

仮城又勅旨　參議　大蔵卿

為房

母平行親女

為隆　參議　従二位

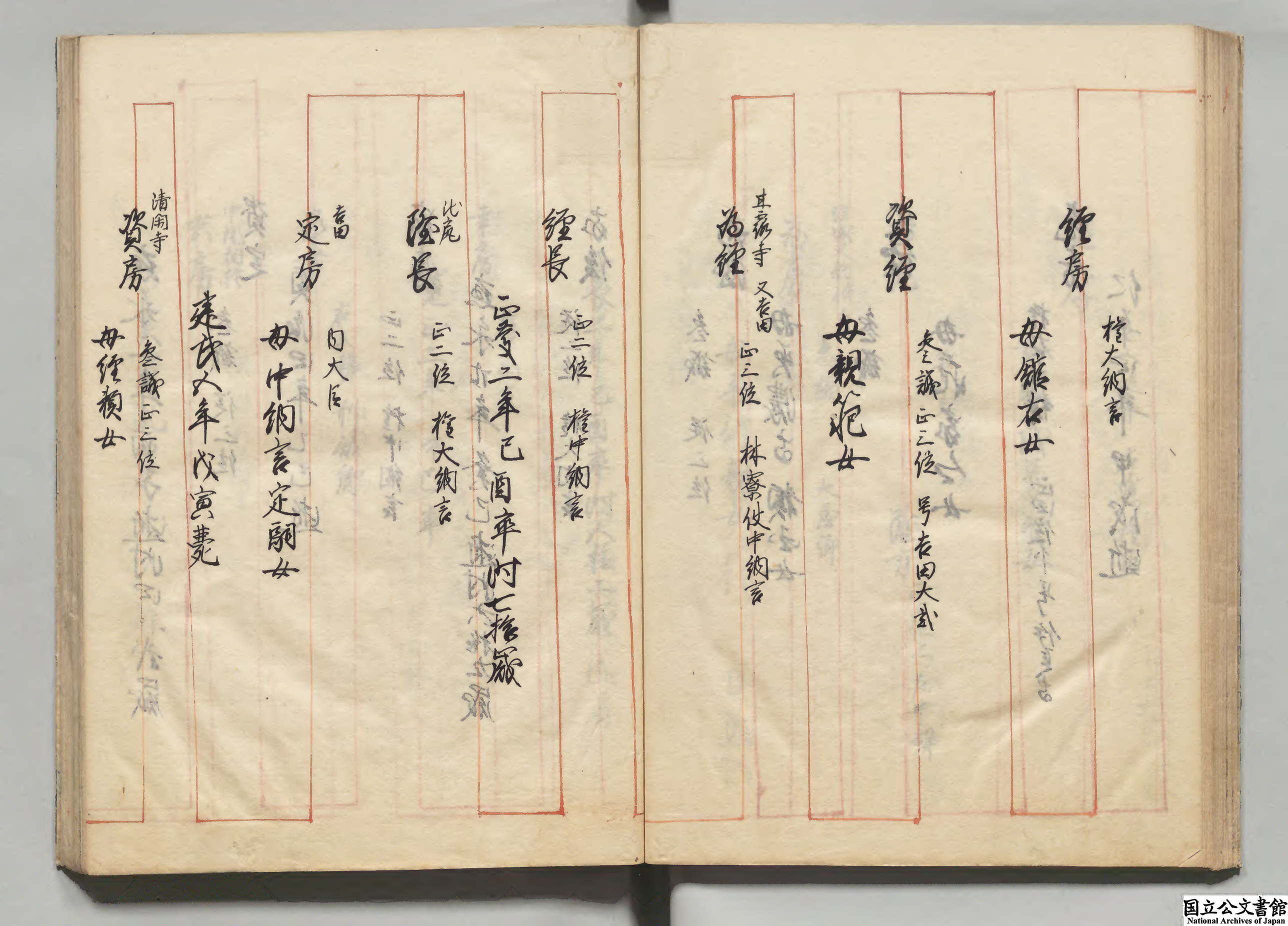
母典侍藤原重女

定輔　參議

母花園家仁女

光房　権右大弁　正四位下号侍従中

仁平四年甲戌逝



従五位下 檜大納言

**經房**

母 藤右女

従三位 号右田大弐

**資經**

母 親範女

其家寺 又右田 従三位 林寮仗中納言

**為經**

従三位 檜中納言

**經長**

四条二年己酉卒 対七拾歳

従三位 檜大納言

**隆長** 北尼

右大臣

**定房**

母 中納言定嗣女

建武六年戊寅薨

清閑寺 参議 従三位

**資房**

母 徳大寺女

應永三年丙子遞付四條武藏

參議 從三位

貞治四年乙巳遞

家房 四二位 檢中納言

應永廿年癸巳遞付六條九藏

家俊 從二位 檢大納言

四長二年己酉卒付六條二藏

幸房 檢中納言

寛四二年辛巳卒

家幸 右大辨 刑部卿

中院相撲

共房

実貞亂男

清涼寺

芸能　権大納言

北庭
芸孝　従一位　権大納言

極小路
定能　従二位　権中納言

憲房　正二位　権大納言　従一位

母内大臣通村公女

貞享二年乙丑再任権大納言

憲定　参議　従三位　右大弁

母大納言永敦女

貞享元年甲子任参議右大弁

同二年乙丑叙従三位附右旧蔵

女　野宮中納言定基室

女　大炊御門加賀守忠方室

為松平英濃守右保妻女嫁忠方

定俊　従四位上　左中将

実正親町一位男

俸禄百六拾石

女　大典侍従四位九条尚克院殿

常憲公御寵女

勅称右中納言室

女

賀長　四之位

俸禄三百石

女　嘗子女

金剛寺　廉宮

俸禄百八拾石又ハ百九俵

治房　従三位中納言

季定　従六位上　右中将

女　竹姫宮　松平大隅守健豊簾中

寛永六年戊子七月廿六日有丁適松平
久千代　西郊〻令十二月廿九日久千代
早世之事　止矣
同七年庚寅八月十九日為　左憲公御養女
有丁適有栖川太宰帥西園寺親王之　令
十二月二日納第　寛保元年丙申九月
廿六日　西園寺親王薨故其事止矣

# 柳宮婦女傳系

十五

国立公文書館
National Archives of Japan

# 柳宣婦女傳系卷之十五

文脈公御女壹

## 長昌院殿之傳系

長昌院殿の父を関中治之侍と云兄を関利之侍と云り姉を河系林若之系丈嫁せり氏長之侍娘ハ伊予殿丈と云婚を魚右近衛者妹を高人なり兄より於て河系林源重関清重ハ共に二子を儲せり紀右小長之侍死メ娘嫡子源重代を於て右の跡を侍利之侍を病死せり弟丈

利之嫡八男世〆弘所絶也 田中家の女子
女人を源左馬之助九郎と云者に聞又和叔
母のお保良 後長昌院殿 を見やり角と 天樹院殿
附の松坂局へ奉公に出せり寛文甲府宰相
綱重ゟ 大猷公四十一歳の時乃御子形ち故
天樹院殿御子なきゆへ松坂局此旅屋おく
御養育ゟ生 御腹長男後石平お保良と御
寄遇ゟ〳〵虎松君を 文脈公御次名 産せり時ハ寛文二年
壬寅四月廿五日ゟ又ゟ又ゟお保良懐妊なりし

ゆへ此度は御院使の方ゟ松坂
の局九平ひおく都合ゟ馬清左衛妻ハ厳しく
さる方ゟ迎入慇懃ゟ接扱〆一家を隠し置
ゟ雑煮おく〳〵ハ厳しく逝去なり時ハ寛
文四年甲辰二月廿八日ゟ御生ゟ御出
乃男子八方源ゟ〳〵源長なり是ハ松
平右を拘盛清武の末也 此時 文脈公八二歳 清武八二歳ゟ
の子ゟ〳〵ゟ〳〵むの業ゟ考 御ゟ不又お保良乃方の
姉ゟ〳〵ゟ彼の御乳池ゟ養育の為ゟ称〆

女方（きく）れ妹れお保こ氏佐の後妻となり氏腰
子女子お人おはせり一女は笹山甚太郎貞清小
嫁し一女八子お云方小姓をり吏乃御前与惣
死去れ後家月尼と称とし剃髪するりお保こ妹を
小浦左衛門小嫁し因敏貞を生し女八黒田甲斐守
長重子嫁をりこ後右の源左惣八郎智与惣清
陸地矣見小俗し者清左惣こ中を戒士子九立
られ甲府家（に抱）を勤仕し去後文面右を
抱俗を清左惣子因をれ代を祢生る也

河原林氏　敬設　墓三相

某　田中治左衛

某　田中利左衛
子世別絶

女　河原林吉左衛門娘名伝不屋文左衛
某月尼　御智与惣清遥妻杉平右衛門　法名或名下紙古　清左衛門母
妹お保良　御智与惣方わ死去の後与惣

の後妻と成二女を産む
正徳四年甲午六月二日歿
法名家隆院菊月尼菊子長中長昌寺

女　伊豫守　長昌院殿　鶴姫三位
　　文昭公御母堂及松平出羽守　姫称　郡名　清母堂
寛文四年甲辰二月廿八日逝于江府時
廿八歳于時　文昭公浄厳士法名杏光
院菊子伊達中日蓮宗長昌寺
文昭公初軍　宣下の後御帰依浄土宗

女　右命正徳元年壬辰十月廿九日歿
菊子東叡山改葬　長昌院殿従三位
天岳長光大姉　天和　寛永二年乙酉十月
　　三日改菊子東叡山時従三位ニ
内蔵允忠直武信妻士小話太郎左衛妻

女　文昭公御後ニ入　右和

女　士信敏負

女　是因甲斐守長重室同侯改号長軌母

為黒田家之尚之養子白寺住位膳妊生
直為家定

河原林源左衛門

某

以仲縁致　長如寺住　文服公
寶永二年乙酉為参会〻列
同七庚寅十二月十六日加恩大百石

良中

河原林源左衛門

以仲縁致　長如寺兄左寺住

文服公
寶永二年乙酉為参会〻列
同七庚寅十二月十六日加恩大百石

某

河原林五郎

文熙公大文人
天英院敬之系

近衛家之流　菊系姓

基熙　前関白右政大臣　従一位

御母領子七百九拾弐石餘

家熙　前摂政右政大臣

熙子　文熙公大文人従一位称天英院　右者嗣一位

姫系

母後水尾院寵女京宮

延寶七年乙未六月十五日御入内

元徳二年癸巳三月二日叙従三位

姉君　徳大寺正三位内大臣左大将実基公息女中

家久　正二位右大臣

姉君　菊子　近衛院後宮　正家室

〃　天美院殿御内意云々嫁

享保十七年壬子七月十九日逝

北六殿

法名妙祥院殿薔香純貞日寶大姉

葬于池上本門寺

実憲　徳大寺中納言　正三位

家俊　四百十石係

# 柳宮婦女傳系　十六

国立公文書館
National Archives of Japan

柳営婦女傳系巻之十六

有章公実御台母
月光院殿之傳系

月光院の生方実文勝田玄蕃ハ加列北生れ
依後浪人し後京へ上り唯念寺世話よく
利発し堀中林昌勝の養子となり
文婦たり深く仏を信じ子を流るを行念

し女子を出生し此時産婦死し不
思議に成るよりしは女子を後京へ上り甲斐国へ
へ次小戸沢上総介方へ仕へ主家大沼書の士矢
溜源実娘分となり勝田御殿へ召仕はれ
寛世と名を改め永六年己丑七月二日湯松寺
と位牌を建立し名を改め二の御部屋と
称せ部屋小山実文林昌勝も還俗し永
百人扶持下る其節如花園幡寺方へ
御部御殿造立の時召抱へられ寺詰

歳有云の御乳母矢鳴
右の子矢鳴治定久の養子となり矢鳴
太郎兵衛と云て後治定実子出生に付治
定人物宜敷に付養嫁に一度引合先方の縁を
以て取結ひ其方を以て橋田御殿造営の内より
出来云形振に付て先方と中立彼矢鳴の名
を作て本の家流に勝田と云名号を付
勝田弟刀と改号せしめて一家の内
にて最初より長男さる先より依て玄哲一
郎昌猪田と名乗まり又月光院の御方に貴
女八姫御神田遠州浜松の城主久定の養子に成
妊の内離別し男子を生む世男子を乳
母に成より又久定方へ参り養育せ
し後久定と名改む離別の妻八瀬茶屋喰合
懐中林昌邦へ再嫁し子を二人を儲し
月光院の御方に其中子の中神田渇所池
醫師松戸意後妻に久定に叔母に成り
久定死して素立し対又久定死後江戸

の儀は代の御とゝ之べしと御候の御よし叔母
器量おろかにて為ら姫様先祖大夫殿
殿より服部八郎殿の姫様なる（〜〜と
記し御望し書物ゝ和歌俗の流文等叔
母方小石垣ゝ久太夫ゝ殿ゝ姫様殿ゝ
お候ゝ也しゝ之

勝田氏

嘉数 蕃

林昌新

永仁山喰会古墳中高田つ徒卒

妻常病死

後田

玄哲

正德四年甲午六月六日歿

養女

林昌勝三世お續の後一女ありお小付還俗し後田と称し養父玄哲と

御小御扶持方お續

林昌勝先代の女也浅野因幡長統家臣

佐々木玄哲還俗付養女となる林昌勝

勝を お續也

姓名失傳 玄哲 後田常力 後援吉

後又後下

嫡孫 君御誕生 十月廿日 女子 姫氏

右本事物　文脈公及湯松殿之入桐間
洛領之百儀
寶永六年乙丑十月十九日　加恩七百石被
桐百入参会
正徳二年壬辰　月　日　拾弐百人扶持之
後拾弐百三石
女
姫名亮世
左京　後称月光院敬誕之位　有章公御母公

寶永六年己丑七月二日　本姓
鶴松殿　御諱家宣　百後改名左京亮
正徳二年壬辰十月十四日　文脈公薨御
四御薙髪称月光院
同三年癸巳十一月十八日　有章公
於軍　宣下御叙従三位被仰上御殿
姫名節子
後号浅宮　従四位下
某
又元服後出遊拾弐歳三石入参会

姪 姪長女
播田周蔵妻 後妻位下

孫 長女 洋次郎子 入家令

姪 姪長男
播田市郎妻 後妻位下

孫 長女 洋次郎子 入家令 後相続

子 次男

文昭公御寵妾
蓮淨院殿之弟

四條家 義弟姓 [illegible] 邸地第

[illegible]

四條流 根笄 [illegible]
貧陸政男

根笄 [illegible]

源方　権前大中納言

宗朝　宣沈権中納言

季豊　左中将　改名

実守　四三位

女　於次第　蓮浄院之御方

為権前源賀参女

女

源賀　権前権大納言　後二位

始源参

女　新女院御和新累間院

源成　権前

於次第之方　後称蓮浄院殿

女

実冬氏養御女

文脉云偽女称二御祖母

大文字君虎寿君之御母也

女

松平越後守 従四位下少将宣富室

安倍氏養御女

法印院殿之系

右田氏 源姓 家紋 桔梗

菜

菜

青家唐

姫一向宗之信心号遵哲後還俗

僧

金性院須拂

南院河戸 真言四箇寺之内 仰付ル

附院主也 娘仕出家出家

某

浪人 神道者

某

右四人之内 内記

百仕 甲府家領式万石後入者 金

之列

病死

女

右近之方 浪拂法印院殿

文昭公 侍女

家平代君御母堂

# 某

姫路藩
吉田内記

徳川家御代弐千石以上家令列

柳宮婦女傳系　十七　大尾

国立公文書館
National Archives of Japan

柳営婦女傳系 巻之十七 終

商將軍家御女壷

御台院殿之系

巨勢氏 和加中井氏之別称

某

聖徳太子の御子なり大工を傳系し

代々大和北中井に居住し大坂御

陳前に日本の趣大工の棟梁なり依付

京伺者今次 楠東裏御造営ふ西三十

二ヶ所へ廻文差し下集め文記也

某 中井

某

巨勢何京

元来紀及巨勢村の百姓に出力量有る人也

八百目の歌にて一昼夜七献の田を耕すと也

女

中井大和従者与市左衛門光貞今年
仕御三男頼方君を養育
御世継ぎ立たせられまひ御帰　右家公
称号事
享保三年戊戌六月朔日紀州より下向
ゆく江戸城二丸へ御入り　御家流君

計御年寄石川左兵衛殿御番所
固防ぎ　御旅中御供

某

姫君十歳
長崎丹波守

従五位下

仕育ゝ早駕ゝ下京の湯殿より
御家流君江戸下向の時随従勤仕幕
府御領大石出側元北上座也
病死

妹名古屋
巨勢伊豆守

従六位下

〇

巣

与先冊波書同時下向従産梅枝女右
兵衛尉

巨勢大和守　従五位下

巣

紀文象督

梅頂女右近衛尉

従二位格大納言家重公実仰雲
澤徳院殿之系

厳原姓　大久保氏

道号　宇都宮藩祖

道昌

孫長十二世孫宇都宮敦文祖宗家之
孫宇都文治之所胤後絶也昌信
子長孫為松平忠仕于信光君

号　左号　少名長右衛門　宇都宮八郎右衛門

事仕　信光君

忠興　宇都宮左衛門

事仕　親忠君　長親君

宇津右馬之亮

忠義

事仕　伝忠君　清康君

大久保新八郎

忠俊

有故改宇津称大久保自是已後兄弟子孫
皆称大久保
南阿弥右馬丞助ト祖也

右次　右馬次郎

忠員　平右馬

事仕　廣忠君　大神君

右平

南阿弥三郎祖

女　加茂文四右馬丞妻女

女

松浦八郎政次妻

太世　七郎左衛門

妻仕　大祢宜

歳付　出雲国大社祖也

太伝　治左衛門

妻仕　大祢宜

子孫断絶

太右　檜左衛門

太長　妻左衛門

歳付　不詳出雲国大社祖

太教　平助　妻左衛門

歳付　妻左衛門　新義第一祖也

女子　長沢家

女　格良茂助妻

女子　法文寺　格式者

女子　黄附横右衛門妻ニ祖

女子　少弐源之亮　従六位下　九百石

黄附山城守右衛門尉等ニ祖

八幡太郎

妻　源沢仙坂吉女

仕紀伊大納言頼宣ニ頃八百大坂

御陣の時従又格式者ニ勤軍事

御前級

正保二乙酉　十月廿六日死

姫名義十郎　先妻吉

女子　従六位下

母同上

当時若年寄を勤め

女　松殿新七郎妻

女　梅の御方と申す妻

右近　八郎大郎　法名ト云

為舞殿子徳川家康御領八百

女　従二位大納言家重室号浅宮実御母妻

正徳三癸巳十月廿四日死

法名深徳院殿妙順日宥大姉

葬于池上本門寺

右寛　八郎大郎

実右舞男

徳川家康御領八百石

後将軍家令徳川統入　御本丸

附事従之勤仕

寛敏 能之恵

為兄忠寛嫡子

寛敏 如右能之助 八幡之部
伊勢守 従五位下

実忠直男

事仕 大納言家重君

後徳寛政御諸侯八百石勤仕有

加恩御領二千石為西丸御充又

加恩御領大千石

従二位権大納言藤宣房卿御猶子称之比之文書

法明院殿之系

附紀氏

安文家之文書之系

伏見御所

貞敦親王　二品兵部卿々

鳥羽院第一皇子の後裔

文仁親王

安文　紀伊大納言光貞公御猶子中納言

縁教公御養子後称天真院

昭暦三年丁酉九月廿六日　誓興

入于紀氏和歌山城

寛永四年丁卯二月廿六日遷

法花天真院殿妙仁日唯大姉葬于

池上本門寺

文　歳有公大夫人御母

延寶四年丙辰八月六日薨御
三十七歳
法名高巖院殿月洞宗真大姉葬
東叡山
同八年丁巳七月廿日　贈従一位

一品中務卿
弁長親王
御裏儀子民親王

掘井文　山城大系

繁文

云文　紀伊中納言吉宗卿御墓中御子

寶永七年庚寅六月四日逝
法名寛徳院殿玄真月中大姉
葬于池上本門寺

聖護院文

吉野吉野門跡

同所

貞建親王　二品式部卿

御妻秋子内親王　東山院皇女而

當今御妹文

青蓮院文　栗田口

宸文　松平摂津守御屋敷中

勸修寺文　醍醐

基方　同　今出川大納言

氏文　従二位　従二位権大納言藤原宣房御屋敷中

享保十六年辛亥六月七日江戸

御屋敷入于御本丸

同十八年癸丑十月二日逝

法名龍昭院殿

葬ル于東廠山ニ

実相院文　岩倉

夏文　吳徳吉　比丘尼吉

大百文（トセノ）

# 柳営婦女傳系

追加

国立公文書館
National Archives of Japan

柳宮婦女傳系之追加

梅渓系圖　久我　中院　六條　岩倉　千種
　　東久世　久世　廣橋　植松

源姓

村上天皇　諱成明　在位廿一年　称天暦帝

母　徳子　昭宣公女

應保二年十月廿一日　崩春秋四拾三

具平親王　二品　中務卿　補後中書王

寛弘六年薨時四十六歳

師房　従一位右大臣　皇太子傅

兼暦元年二月薨時七拾二歳臨

終有被任相国〻勅

顕房　従一位右大臣号六條　贈正一位

堀河院外祖

嘉保元年薨時六拾八歳

久我祖

雅實

大治二年二月薨時六拾九歳

雅定　右大臣

依鳥羽勅兩院別當民長者自此承補當

家也

雅通　内大臣

安元年薨附家系八歳

通親　内大臣　号土御門

建仁二年薨附六條口歳

通光　左政大臣　号後久我

寶治二年正月薨六條式歳

中院家家祖

通友

六條家祖

通有

通心　右大臣

通泰　従一位　号後久我

通雄　太政大臣　号中院

元徳元年薨　阿弥陀堂

長通　太政大臣　号後中院

文和二年薨　阿弥陀堂

通相　太政大臣　号千種

具通　太政大臣　号久世

通宣　右大将

清通　太政大臣　号後久世

通博　太政大臣　号法久世

妹通尚又通行

豊通　右大臣　従一位

大永六年薨時六拾八歳

通言　右大臣　号陽春院

天文五年薨

晴通　右大納言　右大臣

實尚通公男

通興　宮内卿禁裏御所　右大臣

改通俊又通俊

具尭　左頭

東久世祖

○○　實名未分

右通　権大納言

改敦通又季通

寅尚通公男

通世　左中将

久世殿
通前　権中納言

楊梁殿
季通　参議

英通　従一位前権中納言

享保之年薨時六拾九歳

通條　従二位前権中納言

姫君通

通仲　左中将　正四位下

某　白川二位

僧　南都招提院

僧　大佛食堂院

女　大納言　君之乳母

始奉從　北官君下向西坂

某　千種少将

某　寶牛院　清水亀丸

内閣印庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan